

リンカーン大統領と日本

小澤悦夫

1. リンカーン (Abraham Lincoln, 1808-1865: 在職1861年3月4日—1865年4月14日) と言えば初代大統領ワシントン (George Washington, 1732-1799: 在職 1789-1797) と並び日本では特に有名なアメリカの大統領だが、日本との関係で言えば、ワシントンが全く無関係だったのに較べ、リンカーンの在職期間はペリー提督 (Commodore Matthew Calbraith Perry, 1794-1858) が日本の扉を開けて激動の世界に引き込んだ後の幕末最末期の動乱期に対応する。しかしこの期間はアメリカではまさしく南北戦争 (The Civil War, 1861-1865) にそのまま対応しているためリンカーン自身が日本と深い接触をすることは全くなかったのも当然と言えば当然のことである。だが、幕末期の日本外交がイギリスに主導権を握られていたのが事実としても、アメリカが日本との外交を絶ったわけでもおろそかにしたわけでもない。リンカーンが南北戦争に全てのエネルギーと神経を使わされていた時に外交を一手に担っていたのは国務長官のシーウォード (William Henry Seward, 1801-1872) であり、リンカーンは日本に関することは全て彼から報告を受けている。

リンカーンがシーウォードに外交を一任していたのは例えば Donald (1995, p. 412) に次のように述べられていることから窺われる。

Foreign relations did not occupy a great deal of Lincoln's time. For

the most part, he was content to allow the Secretary of State to manage diplomatic affair— just as he permitted the other cabinet members to conduct the business of other departments with minimal interference. He trusted Seward, and he respected the Secretary's knowledge of diplomatic protocol.

本稿の目的は、二人のこのような関係を駐日公使とシーウォード間に交わされた外交文書を辿ることで跡づけるとともに、リンカーンが日本の状況にどのように反応したかを確認することにある。また、ハリスの日記は日米修好通商条約と貿易商程の交渉が終わり調印を待つだけになった1858年6月9日で終わっており、その後の日記の類は今に至るまで見つかっていないので、以下で扱かうハリスの公文書は彼の日本滞在最末期の様子を窺う意味でも貴重なものである。そして、日本人で知らぬ者がいないほど日本近代史に溶け込んでいるハリスと違い、第二代駐日公使プラインも日米両国に対してハリスに劣らない貢献をしたことも確認しておきたい。プラインの功績はもっと知られていい。さらに、どのような英語が使われていたかを知るためと内容の正確さを期すために、関係箇所はできるだけ原文を引くことにする。なお、プラインは多量の文書を送っているが、本稿で扱かうものは、シーウォードがリンカーン大統領に言及している件に限定する。

2. 最初にリンカーンの右腕と呼ばれた国務長官がどのような人物だったのか簡単に見ておきたい⁽¹⁾。

シーウォード (William Henry Seward) は、1801年ニューヨーク州オレンジ郡フロリダ (Florida, Orange County) に生まれた。1820年に Union College 卒業、1822年にニューヨーク州オーバーン (Auburn) で弁護士を開業し、以後ずっと同市をホームタウンとする。1830年に州議会上院議員に当選し1834年まで勤める。以後ニューヨーク政界の大物 Thurlow Weed と後々まで親交を

続ける。1834年に Whig Party 候補として州知事選に出るが落選（以後20年間同党員として活動する。同党は1855年に Republican Party として再編される）。1838年から1842年まで州知事を勤める。黒人には早くから家父長的態度で臨み、州知事時代以降は一貫して奴隷制に反対する。1849年までは傾いた家計を立て直すため弁護士に専念した。

1849年には奴隷制反対の空気が高まっていたこともあり合衆国上院議員に当選する。ハリスを駐日公使に推薦したのはこの間のことである。1850年の「ミズーリ妥協 (Missouri Compromise)」には「憲法より高い法がある」として準州 (territory) での奴隷制に反対し、奴隷制反対の急先鋒と見られるようになる。これは道徳上の確信からだが、しばしば党派性もむきだしにしたとも言われる。

1860年の大統領選挙では共和党の有力候補だったが、奴隷制反対の急先鋒と見られ党の統一が危ぶまれたこと、カトリックへの共感がマイナスに働いたこと、大きな影響力を持つ The New York Tribune の主筆 Horace Greeley の反対、などのためリンカーンにその座を譲った。大統領選ではリンカーンを精力的に応援する。

1861年3月4日リンカーン大統領就任に伴い請われて國務長官 (Secretary of State) に就任する。最初は、内戦を避けるために南部と妥協しようと手を尽くしたり（上院で宥和策を提案したり、閣僚でただ一人 Fort Sumter 放棄を献策した）、スペインやフランスに戦争を仕掛けて南部の分離をくい止めようとしたが（このあたりは彼の調子が最悪の時）、いったん戦いが始まるとリンカーンの最も有力な味方となり、外交を一手に引き受けて見事な手腕を発揮した。日常生活面でも二人は極めて親しかったという（但しシーワードとリンカーン夫人とは終生相性が合わず、いがみ合っていた）。

1865年春の馬車の事故やリンカーンが暗殺された時にブースの仲間に襲われ重症を負わされたりと不幸が重なったが、これを乗り越え実務に復帰し相変わ

らず見事な仕事ぶりを見せた。ジョンソン (Andrew Johnson) 大統領の下でも中心人物として任期を全うした。南北戦争後は南部に対して宥和的態度で臨み、解放奴隷の保護を犠牲にするなど保守的な面が見られ人気と影響力は低下したが、歴史の審判は彼の方針が賢明だったことを示していると言われる。

1871年秋にオーバーンに落ち着くが、体が段々麻痺し翌年10月10日死亡。葬儀では南北戦争中に駐英公使を勤めて見事な腕を発揮したアダムズ (Charles Francis Adams) が「自己を犠牲にして厭わなかったリンカーン内閣の中心人物 (mastermind) だった」と追悼頌徳演説を行なう。人間としてシーウォードほど愛すべき人物は他に殆んどいなかったとの評もある (Malone 1935, s.v. SEWARD)。

3. 日米間の交渉がどのような時代背景で行なわれていたかを確認するために両国の比較的重要な事件をここで対応させておくことにする (日本の事件は※を付けておく。年月日は全て西暦に合わせた)。以下で扱かう公文書の背後には、常に南北戦争の銃弾の響きや死傷者の呻き声がこだましていることを忘れるべきではない。

1860年:

※ 3月24日: 大老井伊直弼、桜田門外で水戸・薩摩浪士に殺害される (桜田門外の変)。

11月6日: リンカーン、大統領に当選 (共和党最初の大統領)。

※11月9日: 遣米使節一行 (正使・新見豊前守正興) 帰国。

1861年:

※ 1月15日: ハリスの通訳官ヒュースケン (Hedrik Heusken) 殺害される。

3月4日: リンカーン、第16代大統領に就任。

4月12日: 南軍、サウス・カロライナ州チャールストンのサムター砦

(Fort Sumter) を攻撃 (南北戦争始まる)。

※ 7月5日：高輪東禅寺の英国公使館，浪士に襲撃され館員負傷する (第一次東禅寺事件)。

7月21日：北軍，ワシントン近郊のブル・ラン (Bull Run) で敗北。リンカーン，長期戦を覚悟。

11月8日：北軍，イギリスに向かう南軍の役人二人を海上で拿捕。イギリスに二人を釈放せねば戦争も辞せずと脅され釈放。

1862年：

2月6日：北軍のグラント將軍テネシー州のヘンリー砦 (Fort Henry) を奪取。

※ 2月13日：老中安藤対馬守信正，水戸藩士らに襲われ負傷する (坂下門外の変)。

4月6—7日：南軍，テネシー川沿いのシロー (Shiloh) で北軍に奇襲攻撃をかける。北軍の死傷者13,000人，南軍の死傷者10,000人。それまでの全てのアメリカが関わった戦争での死傷者総数を超える。南北戦争が全面戦争に変質する。

6月25日—7月1日：リッチモンド近郊で一週間にわたる戦いが行なわれ，双方とも多数の死傷者を出す。

※ 6月26日：英国公使館警護中の松本藩士，英国水兵を殺傷 (第二次東禅寺事件)。

8月29—30日：第二次ブル・ランの戦いで75,000人の北軍が55,000人の南軍に敗れる。

※ 9月14日：島津久光の行列を馬で横切ろうとした英国商人リチャードソン (C. L. Richardson)，薩摩藩士に切り殺される (生麦事件)。

9月17日：メリーランド州アンティータム (Antietam) の戦い。双方合わせて26,000人の死傷者を出す。アメリカの戦史上最も多くの血

が流された日。

9月22日：リンカーン、第一次奴隷解放令を公布する。

※10月15日：幕府、参勤交代制度を緩和する。

12月13日：北軍、バージニア州フレデリックスバーグ (Fredericksburg) で大敗北を喫する。北軍の死傷者12,653人、南軍の死傷者5,309人。

1863年：

1月1日：リンカーン、最終奴隷解放令を公布する。黒人奴隷を兵士に採用することが始まり、南北戦争は奴隷解放をめぐる戦いに変質する。

※2月1日：高杉晋作ら、品川御殿山に建設中の英国公使館を焼く。

3月1—4日：バージニア州チャンセラーズビル (Chancellorsville) の戦いで、数で圧倒的に勝る北軍がリー将軍率いる南軍に大敗北を喫する。北軍130,000人中死傷者17,000人、南軍60,000人中死傷者13,000人。

※4月：新撰組結成され、京都守護職に属す。

※4月21日：家茂、将軍として230年ぶりに（家光以来）上洛。朝廷、6月25日を攘夷決行の日に命じる。

※6月26日：長州藩、攘夷の先兵として下関でアメリカ船 (The Pembroke) を砲撃。さらにフランス船 (Kienchang) を7月8日に、オランダ船 (Medusa) を7月11日に砲撃。

7月1—3日：ペンシルバニア州ゲティズバーグ (Gettysburg) の戦いで南軍敗北する。南北戦争の風向きがやっと北軍有利に傾く。

※7月16日：米国軍艦 (The Wyoming)、米国商船が砲撃された報復として下関 (長州藩砲台) を砲撃する。

※8月15日：英艦隊、薩摩藩と砲撃戦。鹿児島市街を焼く。

9月19—20日：テネシー州チカモーガ（Chickamauga）の戦いで北軍大敗北を喫する。

※9月30日：公武合体派クーデタにより朝議一変。七卿落ち。

11月19日：リンカーン、「ゲティズバーグ演説」を行なう。

1864年：

5月4日：北軍、グラント將軍を司令官として大攻勢に出る。総数120,000人。南軍総数64,000人。

※7月8日：新撰組、池田家を襲撃（池田家事件）。

※8月12日：佐久間象山、京都で暗殺される。

※8月20日：長州藩兵、京都諸門で幕府軍と交戦（禁門の変）。

9月2日：シャーマン將軍アトランタを奪取。リンカーン再選の原動力となる。

※9月5日：四国艦隊、下関砲撃。砲台占領（9月6日）。

11月8日：リンカーン大統領選挙で再選される。対抗馬はリンカーンに司令官を解任された民主党候補マクレラン（George B. McClellan）。

11月15日—12月21日：シャーマン將軍率いる北軍がアトランタからジョージア州サバンナ（Savannah）まで幅60マイル距離300マイルにわたる破壊行進を繰り返す。

1865年：

3月4日：リンカーン大統領の就任式。

4月2日：グラント將軍、リー將軍率いる南軍に対して最後の総攻撃開始。南軍の州都リッチモンド（Richmond）陥落。

4月9日：リー將軍、北軍司令官グラント將軍に降伏する。

4月14日：リンカーン、フォード劇場（Ford's Theater）で“Our American Cousin”を観劇中ブース（John Wilkes Booth）に撃たれ

る。

4月15日：リンカーン，意識を取り戻さないまま朝7時22分死亡。

12月6日：米国憲法修正条項第13条が批准され奴隷制度が廃止される。

4. 最初に現れる文書はハリス (Townsend Harris, 1804-78: 駐日総領事1855年8月4日—1858年1月19日; 駐日公使1859年1月19日—1862年4月26日) と国務長官との間に交わされたものである⁽²⁾。ハリスが報じた件は(1)東禅寺の英国公使館が襲撃された事件(2)兵庫・新潟開港延期の件(3)ヒュースケン殺害の後始末、の3件である。

最初の文書は東禅寺の英国公使館が襲撃された事件を報告したものである。

Harris to Seward (July 9, 1861)

It is my unpleasant duty to inform you that a daring and murderous attack was made on the British legation in this city on the night of the 5th instant.

Mr. Alcock providentially escaped uninjured, but Mr. Oliphant, secretary of legation, and Mr. Morrison, consul for Nagasaki, were wounded. Of the Japanese defenders of Mr. Alcock three were killed and fifteen wounded...

The Japanese were evidently taken by surprise, but they soon recovered from it and fought with great bravery, and at last beat off the assailants.

このように述べた後で「日本には外国人，特にオルコックを嫌う者がいるがアメリカ人はこの偏見の的になってはいず，自分も日本人全ての階層から好かれている」と書いているのがハリスの自負を語っていて興味深い⁽³⁾。国務長官にはさらに以下の日本人に対する好意と公使としての毅然とした態度を示している外国奉行宛の文書を同封している。

This makes the seventh attack on foreigners within the period of two years; and in five of the attempts murder was committed. Up to this day not one person has been punished for these atrocious crimes...

I have given you too many evidences of my friendship for you to doubt my good will; and as your friend, who earnestly wishes to see Japan peaceful, prosperous, and happy, I must say to you, that if you do not promptly arrest and punish the authors of this last deed of blood, that the most lamentable consequences will inevitably ensue...

これに対するシーウォードの返書が次のものである（1861年10月21日付）。

...The assaults committed upon the minister of Great Britain and the other members of that legation, in violation of express treaty, of the laws of nations, and of the principles of common humanity, have excited a deep concern on the part of the President.

Your prompt, earnest, and decided proceedings in aid of the just desire of her Britannic Majesty's minister to obtain adequate satisfaction for that outrage meet his emphatic approval...

この件では、シーウォードがリンカーンに報告して、その意向を確認しているのが分かる。南北戦争が始まったばかりの年で、イギリスとフランスに対しては特に外交努力が必要な時期だった。ハリスの適切な処置に一安心しているのが見てとれる。シーウォードは一貫して駐日公使には条約国（英・仏・蘭）代表と協調するよう指示している⁽⁴⁾。

開港延期に関してはハリス文書が二通ある。まず1862年1月1日から貿易の目的でアメリカ人に江戸居住を認める条項の延期を勧めたものである。

Harris to Seward (August 1, 1860)

...I cannot conceal from you my serious apprehensions that, with the present state of feeling, very grave difficulties might arise from the presence

here of American citizens for the purpose of trade...

If all the foreigners in Japan were prudent and discreet men, the danger arising from their residence in this city would be diminished, but not entirely averted. Unfortunately, a portion of them are neither prudent nor discreet, and they are numerous enough to imperil the safety of the orderly and well-disposed, and seriously endanger the amicable relations that have been established with so much difficulty and labor with the government.

Yedo is neither a commercial nor manufacturing city; the imports are confined to the supply of the inhabitants, and of exports there are none. The manufactures are limited to the production of the coarser articles for common use, which are of too little value to allow of charges for transport...

The trade already developed gives a promising hope of the ultimate establishment of a large and beneficial commerce with this country, but these hopeful prospects may be seriously damaged, and possibly utterly destroyed, by a collision between the foreigners and Japanese, and I greatly fear that the indiscriminate admission of foreigners, at the time fixed by the treaties, to the right of residence in this capital, will lead to the most deplorable consequences, and to a state of affairs fatal to the best interests of all...

続いて外国奉行の依頼文書を添えて大阪・兵庫両港の開港延期を勧めた報告が見られる。

Harris to Seward (May 8, 1861)

...I have never been able to visit Osacca, and am therefore unable to say what may be the actual state of feeling in reference to the permanent residence of foreigners in that city; but I am aware that it is in the district called Tien, or Heavenly, by the Japanese, from the fact of its being the

residence of the Mikado, or spiritual ruler of Japan, and it may well be that the residence of foreigners in that district would be regarded with dislike by a portion of the Japanese people. Hiogo is simply the seaport of Osacca, and its opening naturally depends on that of the city, and Neëgata is a minor consideration...

Since July, 1859, the prices of all export from this country have risen from 100 to 300 per cent. A change so great and so sudden could not fail to press heavily on all official persons of fixed and limited incomes, and it is from this class that the loudest complaints are heard;...

I would respectfully suggest that discretionary power should be given to the diplomatic agent of the United States in this country to act in concert with his colleagues in such manners he may deem most advisable for the interests of both countries.

共に日本の状況と幕府関係者の苦心を理解した上で両国の長期的な友好関係を目指しているもので、ハリスが幕府に深く信頼されていたのも当然だとの感に打たれる。また、ただ幕府の肩を持つだけでないことは、友好関係を傷つけかねない場合は厳しく対していることから理解できる。

これらの報告に対するシーウォードの返書は、まず後者に対して書かれている。

Seward to Harris (May 8, 1861)

The course suggested is, as you doubtless were aware, different from what has been contemplated by the President. He holds, however, your ability and discretion in high consideration, and therefore care will be taken to review the subject fully, upon consideration, if possible, with the representatives here of the other powers concerned.

前者に対する返事は長文のきめ細かいものである。事情に変わりがなければ大

統領もハリスの勧告を受け入れたかも知れないが、ヒュースケンが殺害されたのに幕府は何の満足の行く処理もしていないのでは足元を見られると言い

Seward to Harris (August 1, 1861)

...It was argued by me in the aforesaid notes (プロシヤ・イギリス・フランス・ロシア・オランダの公使に宛てた前記の趣旨の文書) that the Japanese government would infer that we are unwilling or unable to vindicate our rights, if, leaving that transaction unpunished and unexplained, we should frustrate the effect of the treaty stipulation for the opening of the city of Yedo.

The President was, for this reason, of opinion that no postponement of the opening of the city of Yedo ought to be conceded. He thought, however, that some demonstration, which would render the residence of foreigners in Yedo safe, ought to be made, and that the other powers consulted would probably be induced to co-operate in such a demonstration, because their representatives are equally exposed there with our own. The President therefore proposed that those powers should announce to the government of Japan their willingness and their purpose to make common cause and co-operation with this government in exacting satisfaction, if the Japanese government should not at once put forth all possible effort to secure the punishment of the assassins of Mr. Heusken, and also in making requisitions with signal vigor if any insult or injury should be committed against any foreigner residing in Yedo, after the opening of the city in January next, according to the treaty...

We are sensible of the very great perplexity of dealing with a government whose constitution is so different from our own, and whose subjects have fixed sentiments and habits so very peculiar. Moreover, we

have the utmost confidence in your ability and discretion, while we know that it might be hazardous to every interest already secured to substitute a policy of our own, adopted at this distance, for one which you find necessary on the spot.

The President has, therefore, concluded to confer upon you the discretion solicited by you. ...I must, however, urgently insist that, except in the extreme necessity, you do not consent to any postponement of any covenant in the existing treaty, without first receiving satisfaction of some marked kind for the great crime of the assassination of Mr. Heusken while in the diplomatic service of the United States.

ここには、はっきりリンカーンがシーウォードの意向通りに日米関係を処理しているのが窺われる (It was argued by me.../The President was, for this reason,...).

ヒュースケン殺害事件の事後処理は、ハリスが外国奉行と交渉して関係者の満足が行くように決着がついた。

Harris to Seward (June 7, 1861)

...A large number of persons have been arrested on suspicion, but their complicity in the crime could not be brought home to them; some of them were convicted of other crimes, and have been executed. I am convinced that the Japanese are acting in good faith, and that they earnestly wish to discover and punish the assassins of Mr. Heusken.

I hand you herewith copy and translation of a letter from the minister for foreign affairs, stating that the three Yakonines (役人) who attended Mr. Heusken on the night of his murder have been punished for neglect of duty, and also that four guards, who were on duty near the place where Mr. Heusken was assaulted, have also been punished for remissness on that

melancholy occasion...

対してシーウォードの返書。

Seward to Harris (October 7, 1861)

...It affords the President sincere pleasure to know that the government of the Tycoon has exerted so much diligence to bring the assassins of Mr. Heusken to punishment, and that you are satisfied that those exertions have been made with good faith.

It is expected that the government will not abate its efforts until the end so important to a good understanding between the two countries shall have been attained...

ハリスは幕府に対して理解があるように見えるが、これはそもそもヒュースケンの行動を彼が批判的に見ていたことにもよる。1861年11月23日付の報告に次の箇所がある。

...I have heretofore informed you of the great imprudence of Mr. Heusken in being out at night after repeated warnings from the Japanese that he ran a risk of being murdered by exposing himself in the way he did. I firmly believe that his death was chiefly owing to his disregard of the warnings of the Japanese, and I equally believe that, had he followed my example, he would have been a living man at this day.

For the reasons thus briefly set forth, I feel constrained to acquit the Japanese government of any complicity in the death of Mr. Heusken, or of even desiring it; and I am equally convinced that they have loyally and zealously endeavored to arrest and punish his assassins.

ヒュースケンの上司からこれだけはっきり咎められ⁽⁵⁾、さらに以下のような行き届いた決着をつけられたのでは国務長官も文句のつけようがなかったのも無理はなく、一貫してハリスを高く評価することになった。幕府の彼に対する信

頼はこれで決定的なものになる⁽⁶⁾。

Harris to Seward (November 27, 1861)

...Ando Tsusima no Kami (老中安藤対馬守) answered that they were willing to give me any satisfaction that might be in their power, and asked me what I required...

I replied that Mr. Heusken was the only child of his widowed mother, who, by his death, had been deprived of her sole means of support. I would therefore propose that they should pay her a sum sufficient for her support, either in annual payments or in a sum sufficient to purchase a life annuity equal in amount to the income she received from her late son. I stated, very emphatically, that they must not consider this a proposition from me to sell the blood of Mr. Heusken, or that the payment of any sum of money could atone for his murder.

After a few explanations had been asked and given, the ministers promptly agreed to pay me the sum of \$10,000 for the benefit of Mrs. Heusken. They then stated that they did not consider that the payment of this sum in any way released them from their obligation to bring to punishment the murderers of Mr. Heusken.

It was after much reflection that I concluded to adopt the above mode of settling this question; and I trust that my action in this matter will meet with your approbation and receive the approval of the President...

但しヒュースケンの殺害犯人は結局捕まらないままでした。

そうこうしている内に異国での長年の勤務から疲れがたまり、病気がちなことも加わって辞職願いを送ることになる。

Harris to Seward (July 10, 1861)

Sir: I have to pray you to be pleased to lay before the President my

respectful request to be recalled as minister resident of the United States in Japan.

My first commission as the agent of the United States in this country dates back to August 4, 1855, and during the whole period I have been absent but once from my post of duty. This was under a sick certificate, and the whole time of absence was only fifty-one days.

The extraordinary life of isolation that I have been compelled to lead has greatly impaired my health, and this, joined to my advancing years, warns me that it is time for me to give up all public employment.

I could wish to be relieved early next January, as this would enable me to pass the Red Sea, on my return, in the month of March...

この辞職願いに対するシーウォードの返書には興味深いものがある。ハリスを駐日公使に推薦したのは自分とペリーだったとはじめて述べているのである⁽⁷⁾。

Seward to Harris (October 21, 1861)

...You perhaps are informed now for the first time that your appointment as the first commissioner to Japan was made by President Pierce upon the joint recommendation of Commodore Perry and myself.

You will do me the justice, therefore, to believe that I sincerely sympathize with you in your suffering from ill health, and that I regard your retirement from the important post you have filled with such distinguished ability and success, as a subject of grave anxiety, not only for this country, but for all the western nations.

The President instructs me to say that he accepts your resignation with profound regret, and to present to you an assurance of his entire satisfaction with the manner in which the responsibilities of your mission have

been discharged...

シーウォードはハリスの後任も最善の人物を探そうとしている⁽⁸⁾。これは、日本との関係を良好なものに維持するためも勿論あったろうが、南北戦争の最中だったこともあり、ヨーロッパとの外交関係は特に慎重にする必要があったからと思われる。日本にはイギリスとフランスが大きな勢力（条約国）として乗り込んできており、日本で緊迫した事態が生じれば、すぐに本国にはねかえってくるのは確実だったからである。

リンカーンがハリスの辞職願いを残念がったのは当然のことだったろう。これまで見てきたように、ハリスが日本（幕府）と申し分ない信頼関係を結んでいたのは明らかだからである。

5. 以下の公文書は第二代駐日公使プライン（Robert Hewson Pruyn, 1815-1882, 在職1862年4月26日—1865年10月25日）と国務長官との間に交わされたものであるが、在職期間から分かるようにプラインは南北戦争の間ずっと日本に留まってその責任を全うしたのであり、彼に対する評価も高い⁽⁹⁾。

プラインは1862年4月25日に神奈川に着き、翌日ハリスと事務引継ぎを済ませて駐日公使に就任している。5月5日にはハリスと共に外国奉行と会談し、その丁重な扱いを同日付で国務長官に報告している（The cordiality with which I was received induces me to hope that the friendly relations with this government, as established by the gentleman who has so ably and honorably represented the United States, will remain in their present satisfactory condition.）。その返事の中にリンカーンの安心した様子が窺われる。

Seward to Pruyn (September 25, 1862)

...The President learns with sincere pleasure that your relations with the government are cordial and satisfactory.

このように順調に始まった彼の仕事だったが、プラインもまた血なまぐさい

事件を目の当たりにすることになる。英国公使館を警護中の松本藩士が英国水兵を殺傷したいわゆる第二次東禅寺事件である。プラインの報告の一節をあげておく（1862年6月30日付）。

On the night of the 26th instant,...the sentinel, a sailor from the Renard, stationed at the chamber door of Colonel Neale, was desperately wounded by a Japanese, and died during the day.

Colonel Neale was aroused by the cries of the wounded man, as was also the corporal of the British guard, a marine from the Renard, who was in the vicinity going the rounds. The corporal was then attacked, and almost instantly killed, but not until he had succeeded in firing his revolver...

I can only assign this motive: The attack took place, according to the Japanese computation of time, just one night after the anniversary of the attack in 1861, and it is possible that some one or more of the friends of the parties who lost their lives in that attack, or were subsequently punished for it, may have sought the gratification of their vengeance...

As it is very probable that the President and yourself may be pleased to hear what I think of my own safety, I beg to remark, that my position cannot be said to be free from danger...

I think, however, that the fact that I never go armed, which is well known to the officers, and that I rely entirely upon the Japanese for protection, are favorable to my safety...

彼の前任者ハリスも外出時には丸腰だった。自分は日本人に好かれているという自負と幕府の保護を信頼していたことをプラインも承知していたはずで、二代にわたる米国公使の態度が日本人、少なくとも幕府関係者にアメリカに対する信頼感を植え付けたはずである⁽¹⁰⁾。イギリス公使オルコックの強圧的な態

度とは対照的であり、リンカーンやシーウォードもこのことは十分承知していた。例えば、1861年12月19日付ブライン宛の文書でシーウォードは次のように述べている。“I notice in Mr. Harris’s dispatch some ground for supposing that a good understanding does not exist between him and Mr. Alcock, the British minister in Yedo. I forbear from judging upon the causes of the alienation, although we have abundant reason for believing Mr. Harris to be always just and prudent in his intercourse with the representatives of the other western powers.”

この殺傷事件に対するシーウォードの返書には、リンカーンが遠い異国で自国の外交官が何の落ち度もなく公務を務めているか心配している様子が窺われる。

Seward to Pruyn (September 25, 1862)

...The President has received with profound emotion the information that some unknown Japanese subjects have assassinated two British marines, stationed at her Majesty’s legation for the protection of the minister.

Earnestly desirous that, on all such occasions, you shall be found using your best exertions to secure the safety of the representatives of other treaty powers, and their protection in all their national rights, the President has directed me to examine carefully the record you have sent, and to report to him whether, in this instance, there had been any delinquency on your part. It is with great pleasure that, upon receiving my report, he has been satisfied that your proceedings have been, in all respects, the best that could have been adopted to cooperate with and sustain the British legation, and to bring the government of the Tycoon to a just sense of the gravity of this new outrage, and of the danger which it brings to the empire.

この事件の続報でブラインが外国奉行の文書を添えて日本側の誠意を伝えた

(1862年7月8日付)のに対しての返書に、リンカーンが日米両国がともかくも友好的に対処しあっていることをほっとしている様子が見て取れる。

Seward to Pruyn (September 29, 1862)

Sir: Your dispatch of July 8 (No. 37) has been submitted to the President.

He has derived much satisfaction from the reply of the ministers for foreign affairs to the letters which you had addressed to them concerning assassinations at the British embassy. Entertaining no doubt of the sincerity of the explanations contained in that reply, he earnestly hopes that the government of the Tycoon may practice such diligence, in bringing all persons connected with the transaction to condign punishment, as will give assurance to the British government, and to the other treaty powers, that the rights and safety of foreigners in Japan will hereafter be inviolably protected.

また、次の事件のように、日本側の好意を知らされて満足しているリンカーンの様子が窺われるものもある。

Pruyn to Seward (December 16, 1862)

Sir: I regret to have to announce the total loss of the American bark Cheralie (=Chevalier), of New York, on the east coast of Japan, in the province of Hitats (日立). There are special circumstances connected with this disaster which would afford great cause for thankfulness. The officers and crew were not only saved, but treated with humanity and kindness by the officers and people of the province. Nothing which could be done was left undone to display good will; even a flagstaff was erected by the Japanese at the temple appropriated for the use of the crew, from which to display our national flag.

Intelligence of the disaster was sent to this city overland, and the Japanese Ministers immediately placed at my disposal the steamship-of-war Tshoyo Maro (朝陽丸), which carried to the scene of the wreck our consul at Kanagawa, our marshal, and an American pilot...

Seward to Pruyn (April 4, 1863)

...It gives me pleasure to inform you that your proceedings, in connexion with this disaster, are fully approved, and to request you, upon the receipt of this instruction, to address a communication to their excellencies the ministers of foreign affairs expressive of the profound satisfaction with which the President and people of the United States have received intelligence of the generous, humane, and efficient services rendered to the shipwrecked officers and seamen of the Chevalier by the officers of the province as well as by those on board the gunboat Choyo-maroo, which the Japanese government so promptly dispatched to the scene of the wreck. It is by such acts that nations are bound more closely together than they can ever be by mere ties of interest; and you will assure the excellencies that this manifestation on the part of the Japanese government and people, of a desire not merely to fulfil their treaty obligations to the United States, but to increase and perpetuate the cordial good will and friendly relations between the two countries, is accepted by the President as a sure indication that nothing will ever arise to disturb the firm relationship existing between the United States and Japan...

次の報告はかなり微妙な点を含んでいる。薩摩藩と長州藩は開国に反対して朝廷にも反対工作をしている、幕府も朝廷に働きかけて両藩の企てを阻止しようとしている、と述べて

Pruyn to Seward (February 16, 1863)

...They (=two governors of foreign affairs) proceeded to say that... these daimios (大名) had made themselves amenable to punishment, but that this might lead to a civil war, which it was desirable to avoid, as peace had now prevailed for two hundred years. They said that there was great danger of a civil war; and asked, in the event of its occurrence, what would be the feeling and action of the United States.

To this I replied that the government of the United States would, of course, be deeply interested in such a struggle, and that all the moral support it could render, and all material support which would be justified by international law, would doubtlessly be given...

妥当な援助はするだろうと言っているが、実際には南北戦争でそんな助けをする余裕はなく、局外中立を守ることになる。御殿山に建設予定の外国公使館は大名や江戸市民の反対があるので別の場所にしてもらえないかとの要請に関しては、他に適当な場所があれば拘らないと友好的な返事をしている。しかし、すぐに幕府側の危惧が現実のものとなる。御殿山英国公使館焼き討ちが起きるのである。

To this I replied I had no particular preference for Goten-Yama, and would very willingly accept any location equally convenient and pleasant...I then suggested that, as the buildings for the British legation were nearly completed, it might be more difficult for the British minister to consent to a change; but that, if made at all, it was manifestly proper that a better location should be offered, as otherwise it might appear as if Goten-Yama were given up because of threats I had heard...That evening (=February 1), as at two o'clock of the next morning, the British legation buildings at Goten-Yama were destroyed by fire. I immediately sent an officer to inquire into the circumstances, and at once informed the British minister of

the destruction of the buildings— evidently the work of incendiaries.

この焼き討ちに若き日の伊藤博文と井上馨が加わっていたことも夙に知られている。プラインはこの文書に添えて、幕府に攘夷を命じる朝廷の文書を同封している (What ought to be done to sweep away the foreign barbarians?...He (= Tycoon) must, without delay, notify all the daimios; and it is his duty to devise the best stratagem, and speedily, as commander-in-chief, to carry out the deliberations of the whole, and execute their just and patriotic decision. Let him fix upon a period for cutting off the ugly barbarians...).

対する国務長官の返書の一部。

Seward to Pruyn (June 6, 1863)

...The President cheerfully leaves you to exercise your own discretion as to the waiver of any points that may arise between yourself and the government of the Tycoon in regard to the change of the location in Yedo for the residence of our legation...

The letter of the Mikado to the Tycoon is ominous of serious disturbance of the relations which have recently been inaugurated with so much effect through the concert of the principal maritime powers, and which have promised such great advantage to the general cause of progress and civilization. You will represent to the ministers of foreign affairs that it is not at all to be expected that any one of those powers will consent to the suspension of their treaties, and that the United States will co-operate with them in all necessary efforts, and by the use of all necessary means, to maintain and secure the fulfillment of the treaties on the part of the Japanese government...

大統領がプラインに裁量権を認めていることを伝えた上で、日本に対しては条約の履行はきちんとせまるよう指示を出している。こちらの指示は勿論国務長

官としてのものである。

それにしてもプラインが日本での出来事を細大漏らさず国務長官に報告している仕事振りには感心するしかないが⁽¹¹⁾、シーウォードの方ではごく短い返書を出したり、まとめて返事を書いたりしているのが目に付く（1863年7月7日付で8通に、7月10日付で4通に、9月1日付で14通にまとめて返事をしている）。これは、南北戦争の帰趨を決する重大な時期にあったからだと思われる。1863年3月1日から4日にかけてのチャンセラーズビルでの戦いでは、数で圧倒的に勝る北軍がリー将軍率いる南軍に大敗北を喫している。6月3日には、リー将軍が75,000人の南軍を率いて北軍を叩こうとペンシルバニア侵攻を開始している。ゲティズバーグの戦い（7月1日—3日）で北軍が勝利を収め、やっと展望が開けてからプラインへの返事をしたための余裕が出たのも尤もなことと言える⁽¹²⁾。

例えば、5月3日付の報告でプラインは「生麦事件は偶発的なもので、日本人であっても同じ目にあっていたらろう。英国の要求は度外れ」と述べているが（この点はハリスと同じ考えが見られる。無闇に商人を江戸に入れると危険だと言った彼の1860年8月1日付の報告を参照）、シーウォードはプラインの言い分を認めた上でリンカーンの意向を次のように伝えている。

Seward to Pruyn (July 7, 1863)

...Nevertheless, the President permits me to pass them (英国の要求) by, for two reasons: First. The good faith of the United States towards Great Britain and all the other treaty powers in regard to Japan, is impressed upon the records of our diplomatic intercourse with them... Secondly. The common interests of civilization and humanity require that there shall be concert and unity among the treaty powers, in the present crisis, unobstructed by jealousy, or suspicion, or unkind debate of any sort...

I shall now give you the President's opinion of your duty...Your whole moral influence must be exerted to produce or preserve peace between the other treaty powers and Japan, based, if necessary, on a compliance, by the latter power, with the terms prescribed by them, inasmuch as it is not doubted that those terms will be demanded simply with a view to the necessary security of foreigners of all nations remaining in Japan.

Second. If the authorities of Japan shall be able to execute themselves for the injuries which Americans may have suffered at the hands of Japanese subjects, and shall in good faith have granted adequate indemnities, or be proceeding to afford them, and also shall be able to guarantee the safety of American residents, the subject may rest...If the members of the legation, or of the consulates, find it at any time unsafe to remain in Japan, they will, of course, seek a safe retreat as convenient as possible, and will report to this department...

イギリスのやり方（賠償金を幕府と薩摩藩両方から居丈高に取ろうとしている）に納得できなくても南北戦争中にイギリスを敵に回すわけに行かないのは明らかである⁽¹³⁾。1861年11月8日にイギリスへ向かっていた南軍の役人を海上で拿捕し、あわやイギリスを敵に回すことになりかねないところまで行き、シーウォードの助言で問題を解決したことをリンカーンも忘れてはいなかった。遠い、それもどんな国かはっきりしたイメージもない小さな国の成り行きが南北戦争に影響しかねないとはリンカーンも予想していなかったに違いない。この間の情勢を適切に大統領に伝えていたのはもちろんシーウォードだった。

次の返書は9月1日付のものだが、プラインの報告は「1863年5月24日、火事で米領事館消失。外国奉行は横浜に避難するよう勧めたが、身辺の安全に不安はなく、別の一画を領事館に与えてくれるよう要請（5月26日付。6月22日

付で再報)」「横浜に一時退去(6月12日付)」「幕府、イギリスに第二次東禅寺事件とリチャードソン殺害の賠償金\$440,000を払うことに同意」などを伝え、攘夷の風潮が強まってきたことを述べた後で、砲艦外交の必要性を勧めている (It must be obvious to the President that the presence of Commodore Perry's powerful fleet first opened Japan, and it is both natural and undeniable that the same means must be relied on, for some time at least, to preserve to the world what was thus gained. It was the presence of the British fleet and of other vessels-of-war in these waters, which has brought about a peaceful solution of the late complications.) (6月16日付)。また、外国公使に国外退去を命じる文書が届いた後で小笠原図書頭(老中格)への手紙を同封している (The determination of the Mikado and Tycoon, if attempted to be carried into effect, must involve Japan in a war with all treaty powers. It is perfectly absurd to hope for success— it will only bring ruin upon this flourishing empire.) (6月24日付)。

攘夷を実行した長州藩が砲台を破壊され、イギリスと戦った薩摩藩が攘夷の不可能を悟った(薩英戦争)こともよく知られている。これらの報告を受けたシーウォードは、大統領の指示を受けて以下のようにプラインに命じている。

Seward to Pruyn (September 1, 1863)

...Having taken the President's directions, I proceed to consider these interesting and important questions.

First. The facts submitted by you raise a strong presumption that the act of firing the residence of the legation was committed by incendiaries, with a purpose at once political and hostile to the United States, and that the government of Japan could probably have foreseen and prevented it, and that they have at least given to it tacit assent and acquiescence.

Second. The President is satisfied that your removal of the legation

from Yedo to Yokohama was prudent and wise, in view of the circumstances then existing, and the proceeding is approved. But it is equally clear that the government of Japan ought to have so controlled those circumstances as to have rendered the removal unnecessary; and that it is bound to provide for your safe return to Yedo, and for the secure and permanent re-establishment of the legation in that capital.

Third. Your proceedings in regard to the controversy which has arisen between the British government and that of Japan appear to have been conciliatory, and to have been equally just and fair toward both parties, without at all compromising any rights of the United States, and they are approved.

Fourthly. It is with much regret that the President has arrived at the conclusion that the government of Japan has failed to keep its faith, solemnly pledged by treaty, with the United States. ...If our advice had been followed, the dangers which now threaten the empire would have been averted,...Even now,...the President is still disposed to persevere in the same liberal and friendly course of proceedings, which he has hitherto pursued in regard to Japan...

1. You will, therefore, demand of the government of the Tycoon prompt payment of a sum sufficient to indemnify all the losses which were sustained by yourself and other members of the legation on the occasion of the firing of your official residence.
2. You will demand that diligent efforts be made to discover the incendiaries and bring them to condign punishment.
3. You will demand proper and adequate guarantees for your safe return to Yedo, and the permanent re-establishment of the legation there without

delay.

4. You will insist on the full observance of the treaties between the United States and Japan in all the particulars which have not been heretofore waived...

この文書にはシーウォードがリンカーンとかなり日本の状況を話し合った様子が窺われる。主義原則は守りながら、日本で一人奮闘しているプラインに裁量権を与え最善を尽くすのを期待しているのが分かる。イギリスと日本（幕府）の関係ほど緊張しているわけではないことはリンカーンにとっても救いだったろうし、ハリスとプラインの誠実な仕事振りもまたあらためて実感したことだろう。この間の状況把握はリンカーンの年頭教書にも現れることになる。

シーウォードがまとめてプラインに指示を与えることもさらに続く。1864年2月8日付の手紙では7通、3月18日付で8通に対する返書が送られている。前者の報告でプラインは「小笠原図書頭の手紙（長崎以外の港は全て閉鎖する）は撤回されるべき」、と言い“I then remarked I had informed the government that the treaty powers had a right to regard that letter as equivalent to a declaration of war, and that it was extremely important, therefore, that the letter should at once be withdrawn”（1863年11月13日付）と警告している（程なくこの手紙は撤回された）。さらに、幕府が The Pembroke に対する賠償金の支払いには同意したが、支払いを延期してほしい、との要望をはねつけている（12月1日付で幕府は支払いに同意している）。また、江戸に戻るつもりで幕府と交渉を始めてもいる（11月28日付）。対してシーウォードの返書にはリンカーンがプラインの働きに満足している様子が見える。

Seward to Pruyn (February 8, 1864)

...You are instructed to express to the Gorogio (御老中) the President's satisfaction at the withdrawal of the letter of Ogasawara, which had raised a very grave and perilous question.

I have carefully read the correspondence which accompanies your No. 78 (=1863年11月28日付報告), on the subject of your return to Yedo, and I fully appreciate the difficulties and danger which surround your position. The resumption of your residence there, even if it were not so important as it is believed to be, ought to be insisted upon;...

The President is gratified to learn that the claim of the owners of the Pembroke has been satisfactorily adjusted....

第二パラグラフ (I have carefully read...) にはシーウォードが自分の判断で公使に指示を出しているのが読み取れる。国務長官として、大統領に伝えて指示を仰ぐ部分と自分で判断して指示を与える部分をシーウォードは弁えていた。

プラインは1864年1月5日付の報告に国務長官の指示 (1863年9月1日付文書) を老中に伝えた手紙のコピーを同封しているが、忠実に公使として政府の意向を日本側に伝えていることが分かる。1月6日付の報告では、外国奉行池田長発らが鎖港交渉のためにヨーロッパに出発することと、上海で殺人を犯しフランス船で長崎に着いたアメリカ人を逮捕し上海に送還するよう指示を出したことを報告した上で、更なる法整備が必要なことを伝えている。これらの8通の報告に対してシーウォードは3月18日付の返書で、前述の幕府に対する要求はリンカーンの意向であることを繰り返している (As stated by you, these demands— which the President hopes, and indeed confidently expects, have ere this been complied with by the Japanese government— are as follows)。

プラインは以後も相変わらず精力的に報告書を送っているが (この間時折代理公使のアントン・ポルトマンが報告書を提出している)、国務長官の返書は1864年4月から1865年2月の間は一通も送られておらず、1865年2月9日付でまとめて3通に返書を与えた後は8月31日の手紙まで全く送られていない。もちろんこの間にリンカーンが暗殺されたためである (1865年4月14日に撃たれ、翌日死亡)。シーウォード自身も暗殺者の仲間に刺されて重症を負ってい

るのである。

プラインは1865年5月上旬に待ちに待った休暇を過ごすため日本を離れ帰国する。離日する時は戻ってくるつもりだったが、オルバニーに着いてから病気など個人的事情のため10月25日に辞職願いを提出し公職から身を引いた。Treat (1963, pp. 251-52) はあらためてプラインの功績を要約し、次のように述べている。

"But Robert Pruyn, like Townsend Harris, was more than an American diplomat. He could see more than American rights and interests; his vision was broad enough to permit him to see the interests of Japan as well. Hence of all diplomats in Japan in his day he possessed the best understanding of the embarrassing problems created by foreign affairs, and he also retained to the end greatest sympathy for the Shogunate in its difficulties. His policy was a simple one. He would maintain the treaty rights intact, but he would not commit a wrong to preserve a right. 'Moderation and forbearance' were the principles which he believed would serve best in such unsettled days. Perhaps, as an American, he could not approve of the threatening attitude of Britain and France in 1863 because he realized what would have been the effect in his own land if during the early days of the Civil War a similar interference had been carried through."

日米両国にとってハリス・プラインと望みうる最善の外交官を開国時にもったことは極めて幸せなことだったとの感にあらためて打たれる。

最後に、代理公使 (Charge d' Affaires ad interim) のポルトマン (Anton L. C. Portman) がシーウォードに送った、リンカーン死去を悼む幕府の挨拶を載せておく⁽¹⁴⁾。

Portman to Seward (July 5, 1865)

Sir: Late in the evening of the 3d instant, the day of arrival of the mail

at Kanagawa, I received a message from the Gorogio (御老中) to the effect that several officers of rank wished to visit me on this day. I was accordingly waited on by the governors for foreign affairs with a numerous suite, who, in the name of his Majesty the Tycoon, and his government, came to request me to convey to the President and yourself the sentiment of profound pain with which they had learned the assassination of Mr. Lincoln and the attack on yourself, and also their sincerest wishes for your speedy recovery. I assured these officers that I should not fail to comply with this request at the earliest opportunity.

6. リンカーンは在職中に4回議会に Annual Message を送っているが、その内3回に日本が出てくる。合衆国が公式に日本に対してどのような姿勢を取っていたかを見る資料として興味深いものがある (Richardson 1898)。まず、第2回のもの (December 1, 1862)。

Very favorable relations also continue to be maintained with Turkey, Morocco, China and Japan.

1862年は第二次東禅寺事件・生麦事件などが起こったが、いずれもイギリスが絡んでいる。アメリカはハリスとプラインのおかげもあり、日本とは友好的な関係を結んでいることで特筆していないのだと思われる。

第3回は日本の事情が急を告げていることもあり、いささか不安が感じられる部分がある (December 8, 1863)。

In common with other Western powers, our relations with Japan have been brought into serious jeopardy through the perverse opposition of the hereditary aristocracy of the Empire to the enlightened and liberal policy of the Tycoon, designed to bring the country into the society of nations. It is hoped, although not with entire confidence, that these difficulties may be

peacefully overcome. I ask your attention to the claim of the minister residing there for the damages he sustained in the destruction by fire of the residence of the legation at Yedo.

第4回も難しい状況を認めながら、両国の更なる交流を願っている大統領の姿が見て取れる (December 6, 1864)。

Owing to the peculiar situation of Japan and the anomalous form of its Government, the action of that Empire in performing treaty stipulations is inconstant and capricious. Nevertheless, good progress has been effected by the Western powers, moving with enlightened concert. Our own pecuniary claims have been allowed or put in course of settlement, and the inland sea has been reopened to commerce. There is reason also to believe that these proceedings have increased rather than diminished the friendship of Japan toward the United States.

先に、リンカーンは外交問題はシーウォードに一手に任せていたと言ったが、これらの箇所は全てシーウォードが書いたものである (Sandburg 1954, p. 634)。

Temple (1960) は、リンカーンが南北戦争中たくみな外交策で合衆国の危機を回避したと述べ、次のように結論付けている。

“Lincoln’s forte was a spirit of fairness coupled with a reverence for legality, and few Presidents have had an equal amount of success with their foreign policies. None save Lincoln has ever been called upon to steer a course through foreign relations while at the same time being engaged in a fratricidal conflict where the booming of cannon was sometimes heard in the streets of Washington, D. C.

南北戦争時にリンカーンが大統領だったことは合衆国にとっては勿論、日本にとっても幸運なことだった。ただ、リンカーンの偉大さが外交面に発揮され

たのが事実としても、外交を一人で見事に指示し続けた国務長官シーウォードの功績を忘れるわけには行かない。リンカーンの方が人間の器が一回り大きかったのは確かであり、重要な外交政策はリンカーンの指示を受けていたのは当然としても、南北戦争中という危機の時代に優れた外交的判断を下し続けたのは見事と言うしかない。駐英公使に C.F. アダムズを、駐日公使にプラインを据える判断も図抜けていた。

日本が開国直後にハリス・プラインという公使をもったのは幸運なことだったが、ハリスを推薦し、プラインを任命したシーウォードも日本に対する貢献は大きかった。彼から日本事情の報告を受けていたリンカーンが、やはり苦境にある日本政府（幕府）のことを他人事ではないと感じ、遠い異国に同情の思いを馳せたこともあったのではないかと想像さえ許されるのではなかろうか。

南北戦争も幕末維新もすでに百数十年も昔のことになったが、両国ともいまだにこの時のトラウマから抜け出せていないように思われる。リンカーンをはじめ、この困難な時代を切り開いてきた先人の努力を思い起こすのも無駄なことではないだろう⁽¹⁵⁾。

※本稿は2002年度早稲田大学在外研究制度のおかげで成ったものである。研究員として受け入れていただいた Harvard-Yenching Institute の所長 Dr. Tu Weiming に深く感謝したい。また、Harvard Libraries (Widener Library, Lamont Library, Law School Library) の関係者の好意に対しても厚く感謝したい。

注(1) Malone (1935, s.v. SEWARD) と Neeley (1982, s.v. SEWARD) を参考にした。詳しくは Taylor (1991) と Van Deusen (1967) を参照されたい。

(2) Treat (1963, p. 105, note) によれば、ハリスから国務長官に宛てた公文書は64通あり、うち1通が1861年度の *Papers Relating to Foreign Affairs* に収められており、10通が1862年度に収めら

れている。シーウォードの返書はハリス宛11通、ブライン宛4通のうち前者に1通、後者に8通が収められている。ハリス文書が全部読めないのは残念だが、外交文書を体系的にできるだけ多く編集・公刊するようにしたのはシーウォードだという。

なお Van Deusen (1967, p. 519) によると、当時の通信は日米間で3—4ヶ月、サン・フランシスコからワシントンに電報を打つても2ヶ月はかかったという。本国に指示を仰げず自分の判断で対処せざるを得なかった件も多々あった所以である。それだけ一層ハリスやブラインなどの判断力に優れた外交官の手腕がものを言った。

- (3) ここで引いた1861年7月9日付文書で次のように述べている。

"I am happy to say these prejudices do not extend to our citizens in this country, and I think that I am personally popular among all classes of Japanese."

原文で読むとさらに味わいが増すだろう。特に、アメリカ人は嫌われていない（イギリス人は嫌われている）という所に外交官として自国民を守る勤めを立派に果たしている自負が窺われる。

- (4) この点について Treat (1963, p. 114) は以下のように述べている。

"During his administration, Mr. Seward consistently instructed the American Ministers in Japan and China to act in concert with their colleagues, and these instructions were carried out by Mr. Pruyn and Mr. Burlingame." Randall & Current (1955, p. 74, p. 76) も次のように述べ、ハリスとブラインの外交姿勢を評価している。

"Britain, France, and Russia were truculent and excessive in their demands, while the United States maintained an attitude of marked friendliness toward the Japanese people.

For this friendly attitude the credit lies largely with two New Yorkers— Townsend Harris, envoy until April 1862, and Robert H. Pruyn, his successor in that post...

Through all the intrigue, violence, and official evasions in the far eastern Empire the key to American policy was forbearance, avoidance of war, patient attention to the oriental point of view, and cultivation of friendly relations."

Dennett (1941, p. 408) は、シーウォードの対アジア政策は、武力による征服ではなく、貿易による国力振興を助けることでアジア諸国の政治・経済の刷新を目指す所にあった、と述べている。ヨーロッパ列強の対アジア強硬策にはベリーを日本に派遣する所から反対していたのが彼の文書からも窺われる（今に至るまで見られるアメリカの「善意の押し付け」も顔を出しているが）。

"Seward had a very definite idea as to the function of the American people in the commerce of the Pacific Ocean. Foreign trade, he thought, was to replace military conquest and to become the vehicle for a commerce of ideas. The great American contribution to the world, it seemed to him, was political theory. Just as the Atlantic states through their commercial, social and political sympathies were steadily renovating the governments and social constitutions of Europe and Africa, so 'the Pacific states must necessarily perform their sublime and beneficent functions in Asia.' Seward appears to have expected that Asia thus enriched from America would repay the debt in gratitude. He said, while Perry was in the East, 'Certainly no one expects the nations of Asia to be awakened by any other influence than our own from the lethargy into which they sunk nearly three thousand years ago. If they could be roused and invigorated now, would they spare their European oppressors and spite their American benefactors?'"

シーウォードのこの方針とハリス・ブラインの対日姿勢は本文に引く彼らの文書から十分に窺えるだろう。

- (5) Treat (1963, pp. 120-21) はこう述べている。

"His (=Harris's) dispatches to Mr. Seward of November 23 (1861) shows how thoughtfully he considered the whole question and gives further confirmation of his keen sense of fair play."

ハリスは決して自国の利益だけを主張せず、長期的な両国の友好関係を視野に入れていた（下田条約交渉の時もそうだった）。この点は第二代駐日公使ブラインにも見事に受け継がれている。

- (6) ヒュースケン殺害後、イギリス・フランス・オランダ・プロシヤの代表は横浜に避難するが、ハリスは江戸を離れなかった。幕府の苦しい事情を理解し、その警護を信頼していたからである。Treat (1963, pp. 112-13) も次のように述べている。

"But there can be little doubt today that in remaining in Yedo and placing confidence in the good faith of the Japanese government, in recognizing the difficulties under which it labored, and in endeavoring to co-operate with it, Townsend Harris more adequately met the needs of the hour. And his courage and confidence was not wasted upon the Japanese...And on April 2 Harris was received by the Shogun with 'every mark of honor' when he presented his new letter of credence."

- (7) 但し、ハリスが全くこの間の事情を知らなかったとは考えられない。ペリーには、彼が日本遠征の際に中国を通った時、上海で逢って日本帯同を願い出てもいる。この時は受け入れられなかったが、ペリーはハリスに好印象をもったことが窺われる。そのため、ハリスが駐日公使の職を求めて友人らに助力を依頼した時にペリーは推薦者になっている。地元（ニューヨーク）選出上院議員のシーウォードにも援助を頼んでおり、その結果1858年8月4日に任命されることになる。

- (8) この間の事情を Treat (1963, p. 128) は以下のように述べている。

"In spite of the serious situation which had developed with the progress of the Civil War and strained relations with England and France in the first year, Mr. Seward considered the mission to Japan one of extreme importance, and desired to have some one there whom he knew thoroughly and on whose sound judgment he could rely."

ブラインは彼の期待に十二分に答えたと言える。

- (9) Treat (1963, pp. 130-31) は次のようにブラインを高く評価している。

"In every other respect, however, Mr. Pruyn's position was a most difficult one. The Civil War at home caused doubts as to the very survival of the Government which he represented. It prevented the presence of an American fleet in Western waters to support his position...Just as Harris won his great Treaty without the support of a squadron, so Pruyn maintained the honor and dignity of the United States practically without material backing. And the three years covered by his mission were the years which saw the culmination of the anti-foreign movement. He had to face crises far more serious than those which Harris knew. If Perry opened the gates of Japan, and Harris threw them open wide, then Robert H. Pruyn is entitled to no little credit for preventing their being closed again."

ここでブラインの略歴をあげておく (Malone 1935, s.v. PRUYN)。

Robert Hewson Pruyn。1815年2月14日、ニューヨーク州オルバニー (Albany) に生まれる。1833年 Rutgers College 卒。1836年同大学文学修士号取得、弁護士を開業する。1839年オルバニー市議会議員に当選。1841年から1846年までニューヨーク州陸軍の法務総監 (judge advocate-general) を勤める。

1848年から1850年までニューヨーク州議会議員。1851年に法務総監に復帰。1854年には州議会議員に復帰し下院議長を勤めた。この時シーウォードの僚友となる。1860年にリンカーンが大統

領に当選しシーウォードが国務長官になったため駐日公使に任命される(1861年10月12日)。翌年4月25日、日本着。1865年5月休暇を過ごすため離日。病気など個人的な理由で同年10月25日に辞職願いを提出し公職から身を引く。

オルバニーに戻ってからは Albany National Commercial Bank 頭取をはじめ、いくつかの金融機関と教育機関の理事を勤めた。1882年2月26日死去。

- (10) Treat (1963, pp. 133-34) はブラインが、いかに幕府の置かれた苦しい立場を理解したかについて次のように書いている。

"First of all, he had the utmost consideration for the Japanese people as a whole, and especially for the harassed officers of the Shogunate. He recognized with unusual clearness, in view of the lack of accurate information, the difficult position in which they were placed, between the foreigners who demanded the fulfillment of the Treaties to the letter, and the rising tide of Imperial opposition."

また、このような姿勢を可能にしたブラインの性格についても述べている。

"Mr. Seward had advised the most friendly co-operation (with the other Treaty Power representatives), and Pruyn's genial personality made this easy." (ibid., p. 135)

- (11) ブラインの報告書は当時から高い評価を受けていた (Treat 1963, p. 251, note)。

"Charles Sumner, chairman of the Senate Committee on Foreign Relations, is reported to have said that Mr. Pruyn's correspondence was unsurpassed in ability by any other American envoy, with possibly the single exception of Hon. Charles Francis Adams."

Charles Sumner (1811-1874) は、リンカーン政権で上院外交委員会委員長としてリンカーンに協力した。リンカーンを尊敬し、1865年6月1日にリンカーンの追悼演説をしている。Charles Francis Adams (1807-1886) は、リンカーン政権で駐英公使を勤めた。父 (John Quincy Adams) も祖父 (John Adams) も駐英公使と大統領を勤めた名家の出である。

- (12) この時期のアメリカ本国の状況は次のようなものだった (Treat 1963, pp. 200-201)。

"The United States was involved in the great Civil War, and the summer of 1863 marked the high tide of the Confederacy. Although the relations with the European Powers had improved, yet there was still every reason to preserve a good understanding with them. For this reason, if for no other, Mr. Seward continually counseled the American Minister to sustain and co-operate in good faith with the Legations of the Treaty Powers."

ブラインは1863年7月24日付文書で、日本人がアメリカの南北戦争のことを細かな点まで知っているのと驚きを込めて報告しているが、日本側に本国の危うい状況を知られて交渉が難しくなるのを恐れていたとは容易に想像できるところだろう。

"Nor could I be unmindful of the fact that our domestic difficulties were well known to the Japanese government and people; that many publications had been issued, and had an extensive circulation, giving accounts of our battles, and especially of our iron-clads."

- (13) この要求は Treat (1963, p. 157) が述べているように、明らかな国際法違反である。

"This was an extraordinary decision, as far as the canons of international law were concerned. The British government had treaty relations only with the Government of Yedo, and from it alone should redress have been demanded."

- (14) United States Department of State (1866): *Appendix to Diplomatic Correspondence of 1865*

- (15) リンカーン大統領の周りで日本が話題になっていた証拠の一つとして、秘書が彼を "Tycoon (大君)" と呼んでいたことがあげられる。

"Lincoln's temper soon recovered. In early August his secretary John Hay wrote that 'the Tycoon is in fine whack. I have seldom seen him more serene.'" (McPherson 1989, p. 667)

これは、司令官の George Gordon Meade がゲティズバーグの戦いで勝利を収めながら南軍を追撃して壊滅的な打撃を与えることを控えたのに立腹した後のことである。

REFERENCES

- Dennet, Tyler. 1941. *Americans in Eastern Asia* (New York: Barnes & Noble)
- Donald, David Herbert. 1995. *Lincoln* (New York: Simon & Schuster)
- Malone, Dumas (ed.). 1935. *Dictionary of American Biography, Vols. XV & XVI.*
(New York: Charles Scribner's Sons)
- McPherson, James M. 1989. *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era* (New York: Ballantine Books)
- Neeley, Jr., Mark E. 1982. *The Abraham Lincoln Encyclopedia* (New York: McGraw-Hill)
- Randall, J. G. & Richard N. Current. 1955. *Lincoln The President: Last Full Measure*
(New York: Dodd, Mead & Co.)
- Richardson, James (ed.). 1898. *A Compilation of the Messages and Papers of the Presidents 1789-1897, Vol. VI.*
(Washington: Published by Authority of Congress)
- Sandburg, Carl. 1954. *Abraham Lincoln: The Prairie Years and War Years*
(New York: Harcourt, Brace & Co.)
- Taylor, John M. 1991. *William Henry Seward: Lincoln's Right Hand* (New York: HarperCollins)
- Temple, Wayne C. 1960. Lincoln and American Foreign Affairs. in Ralph G. Newman (ed.). *Lincoln for the Ages*, pp. 219-225.
(Garden City, N. Y.: Doubleday & Co.)
- Treat, Payson J. 1963. *Diplomatic Relations Between the United States and Japan, Vol. I (1853-1875)*
(Gloucester, Mass.: Peter Smith)
- Van Deusen, Glyndon G. 1967. *William Henry Seward* (New York: Oxford University Press)
- United States Department of State. 1861-69. *Papers Relating to Foreign Affairs (1861-1868)*
(Washington: Government Printing Office)
- United States Department of State. 1866. *Appendix to Diplomatic Correspondence of 1865: The Assassination of Abraham Lincoln*
(Washington: Government Printing Office)